



自分のような人間ばかり

後期になると（スキー教室以外）大きな行事もなく、この通信に書くことも無くなって困る。そこで、本の紹介や新聞記事の引用が多くなるのだが、そういう紹介や引用の中に、将来の自分の進路を決める「ヒント」が隠されているかも知れないので、まあ前期同様つきあってほしい。

*

さて、昨日は早速「法哲学」というものを紹介したのだが、引用の最後に出てきた井上達夫先生は、私の畏敬する先生のお一人である。図書室に『リベラルのことは嫌いでも、リベラリズムは嫌いにならないでください』（毎日新聞出版、2015）という本が入っているので、将来法学部系統への進学を考えている人はぜひ読んでみてほしい。もちろん、易しくはないが、分かるところだけでも頭に残しつつ読み進めていけば、それが次にこの分野の本を読んだ時の読解力アップへと結びついてゆくような本である。

その中で井上先生が強調しておられることの一つが、昨日の引用にもあった

「反転可能かどうかで正統性を判断できる」という考え方である。

「自分がされて嫌なことは相手にもしない。二重基準は許されません」ということだ。

これをもう少し広げて考えると、法律を考える際の根本原理であると同時に、人間の道徳の根本原理の一つでもあることに気づくだろう。例えば『論語』には、

己所不欲、勿施於人。
と述べられている（訓点をつけよ。答＝明説

40ページ）。

同じことは、キリスト教では、

Do to others what you would be done by.

といったところか。漢文を出したので英語で引用してみたが、「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもその通りにせよ。

（これが律法であり予言者である。）」（「マタイによる福音書」第7章）という内容である。

これらは、2年次に「倫・社」などで学ぶかも知れないが、「黄金律」とも呼ばれ、多くの宗教に共通して見られる倫理的言明でもある。

*

同じことを、何度も紹介している日比谷退学生（笑）の哲学者内田樹さんは、「世の中が、自分のような人間ばかりになっても大丈夫、というような人間になることを目指す」という言い方で表現している。

つまり、自分が人の裏をかいて得をするような人間だったとして、残りの人もみな、人の裏をかくことばかりをねらっているような人間だったとしたら、あなたはその社会で本当に幸せになれると思いますか、と問いかけているのである。きわめて簡単でありながら、きわめて本質的な問いであろう。

ふりかえって自分はどうか？ そして、みんなはどうか？ 自分のような人間ばかりの世の中は、本当に幸せで安心な世の中と言えるだろうか？ 違うかも…と感じるとしたら、やはりその理由を改善すべきなのではないだろうか。私は、気づいたときには改善するように努めようと思っている。